

鶏肋記

映画文学人生論

井伏鱒二 (1898-1993)

『鶏肋集』(1936) 「早稲田文学」 「竹村書房」

『半生記』 (1970) 「日本経済新聞社」

太宰治『「井伏鱒二選集」後記』(1948)

「筑摩書房」

これを存するは恥づく、これを棄つるは
惜しむべし (鶏肋)

鶏肋とは鶏の肋骨のことで、「大して役に立たないが、捨てるには惜しいもの」という意味だという。わざわざそんな言葉を自叙伝の題名に選んだところをみると、井伏鱒二は自分を鶏ガラのように恥ずべき存在ではあるが、捨てるには惜しいと思っていたようだ。

鶏ガラというより山椒魚に似ていると私は思うが、鶏ガラも山椒魚も似たようなものかもしれない。『山椒魚』は井伏鱒二が二十五歳のとき、同人雑誌に発表した処女作。ある評論家から読売新聞の文芸欄で「古くさい」と評された以外には、まったく反響はなかった。

ところが、意外なところに読者がいた。昭和二十三年刊行の『井伏鱒二全集』後記によれば、当時、青森の中学一年生だった太宰治が『山椒魚』に接し、埋もれたる無名不遇の天才を発見したと思つて興奮したという。

太宰は作家になつてから、『黄村先生行状記』で「私は山椒魚を尊敬する」と黄村先生に云わせている。井伏も太宰の面倒をよくみて、嫁さんの世話までしてやった。ところが、太宰は、「井伏さんは悪人です」と遺書に書き、他の女と玉川上水で心中してしまった。

井伏は太宰のように早まっていのちを棄てるようなことはしない。『鶏肋集』は三十八歳、『半



鶏肋記

映画文学人生論

生記』は七十二歳と、二度も自叙伝を書き、しぶとく生き抜いて、九十五歳で死んだ。

井伏鱒二は酒飲みだったといわれている。「この盃を受けてくれ、どうぞなみなみつがしておくれ、花に嵐のたとえもあるさ。さよならだけが人生だ」という漢詩「飲酒」の意識は有名だ。しかし、現実問題として大酒飲みが九十五歳まで長生きをするのは難しいのではなからうか。

釣が好きだったともいわれている。エッセイや小説『釣宿』を読むと間違いないと思うが、太宰治は「井伏さんが本心から釣が好きかどうかということについては、私にもいささか疑念があるのだ。釣の名人というより、旅行の名人といったほうが適切」という。

釣の名人という世評に疑問があるとすれば、大酒飲みという世評も少しあやしくなってくる。井伏鱒二はほんとうの自分を隠して、仮の姿を誇張して世間に見せていたのかもしれない。

しかし、作家は作品を残す。作品をじっくり読めば。作家の本心がわかるはずだ。

ところが、井伏鱒二は八十七歳のとき、『井伏鱒二自選全集』で『山椒魚』の結末部分を大幅に改変した。そうになると、作者の本心が改変前の原稿にあるのか、それとも改変後の原稿にあるのかわからなくなり、今なお読者を迷わせている。

山椒魚いちにち死んだふりをして 加藤かけい